

保育現場と学問の交流の中で

——一九七八年・お茶の水女子大学児童学科

現職研究会の学びの中から〈その二〉——

長山 篤子



先月号では、M幼稚園の保育実践研究を通し、それぞれの幼稚園のもつ文化が、子どもに及ぼす影響について記しました。M幼稚園の見学レポートを持ち寄ったのゼミは、M幼稚園の先生方の保育環境の見直しになった事は言うまでもありません。ご自分の園の特色を意識化する事により更に

次の課題に取り組まれたようでした。他の保育者も研究者も、それぞれに、保育を省察する課題が与えられました。その意味でまさに「保育現場と学問の交流」の一端を担っていたと思います。さて、今月は、A幼稚園の公開保育と実践研究で取り扱われた事柄について記してみたいと思

ます。A幼稚園のレポートは、一九七九年の「幼児の教育」一月号に「現職研究レポート」として、当時の宇部短期大学太田留美氏によってまとめられています。私は、この研究会に所属した者として私が参観した視点から、A幼稚園の保育について学んだ事を記してみたいと思います。

A幼稚園参観レポート……二月十三日

A幼稚園は、千葉房総半島の入口にあり、二月という最も寒い時期の参観となったが、春を思わせる雰囲気がある園を包んでいた。門を入ると、中央に大きな松がありその下に白いテーブルとイスが置かれている。テーブルの上には小さなカップにストックの花びらが入れてあった。保育室には、沢山のストックときんせん花が飾られている。土は黒く、広々とした園庭は、自然の息吹が充分に感じられた。前回参観のM幼稚園が人間の作り出

した文化に支えられているのに比し、A幼稚園は自然に支えられた保育が実践されている様子が窺えた。

そんな雰囲気の中で、注目されたのは、子どもたちの動きであった。自由感に溢れ、のびのびと活動している子どもたちが心地良さを感じると共に、K男、U男の動きに参観者は、注目した。K男、U男と保育者との関わり方に不安を覚えたのである。一方、私は、四歳の七名の男児の遊びに関わる保育者の動きにも不安を覚えた。この二点について次のようなレポートが記された。

四歳七名の男児の遊びを巡って

ママごとコーナーの赤いテーブルに七名の男児が座ってる。手に小さな積木やわりばしをつないだ棒を持っている。

Y君「みんな言うことをきかなければだめだ

ぞ——」

他の男児は騒いでいる。

Y君「お——い、みんな武器をかせ、武器を持つてこい」

Y君は他の六名に指示をし、武器と呼んでいる棒を集め一か所に置く。Y君は続いて良い武器と悪い武器に分け、自分の物と取り替えたりする。

その繰り返しで「きゃ——、わあ——」とふざけ合う。保育者が「トントン失礼します」と入ってくるが、Y君は、「武器があるから座らないで下さい」と言う。保育者と男児たちの気持がちぐはぐで保育者は棚に置いてあるダルマを指して「ダルマさんをこわさないでね。安心して外に行くわね」とこのグループから離れてしまう。その後女児が「ドロボーごっこしているのしょう」と入ってくる。Y君は「正義の味方ごっこやっていると」言う。他の男児は女児を追いかけたり

する。Y君は「おいやめる。先生におこられるぞ——やめ

——」と指示を出す。「こんどいじめるとすぐ仲間に入れてやらないぞ。おれがやっつけろと言ったらやっつけるのだぞ——」などと言う。ふざけ合っているうちに片づけになる。

Y君の指示で、遊びが発展するということもなく、ただ一緒にいることを喜んでいる様子で、このグループの遊びは終了してしまった。途中、保育者が入って来るが、子どもたちとの会話がちぐはぐでかみ合わなく、子どもたちの気持も掴めないままうまく言葉もかけられなく、保育者は外に出て行き、最後まで、このグループと関わる事が出来なかった。



K君を巡って

年長男児K君ははげしくあちこちを走り回っている。何かに集中して遊ぶことがない。友達との接触もみつからない。

テラスに行き、水道の水を勢いよく出す。蛇口を外に向けて水を放出する。その水の流れを見て、特別に喜んでいる様子もない。まわりに子どもたちが駆け寄る。「K君が水を流している!!」と女児が叫ぶ。M先生が走ってくる。しばらく様子を見ている。一緒に何かしようとするがK君は応じない。M先生が「寒いから、水は大事だから」と水道を一旦止めるが、K君は再び蛇口をひねる。M先生も戸惑いながらその様子を見ている。他の子どもたちも「あ——あ」と言いながら見る。

テラスやまわりがすっかり濡れる。K君は、濡れた場を歩きまわり、そのまま走って他の場所に

移動する。M先生は、テラスをぞうきんでふき、まわりを片づける。年長女児も一緒に手伝う。

*

以上の場面を巡って二月二十日にゼミが持たれました。私のレポートにはK君を巡っての記録しかありませんが、四歳児クラスのU君の存在についても他の観察者の注目が集まりました。U君は、K君とは対照的に、保育者との会話も殆どなく、遊びに誘われると逃げてしまい、遠くから遊びを見ていたとの事でした。

ゼミではまず二人の男児について担任の先生方により、これまでの園生活の状況や、先生方がどのように接していらしたか、説明がありました。U君については、担任の先生は、いつも何かしてあげたいが、どのように関わって良いかわからないとの発言がありました。

K君については、入園の出会いの時から多動な行為に驚かされたとの報告を受けました。又高い所を好んで登ってしまうので危険であり、困った様子も報告されました。しかし、年長組になって、友達と遊んだり、保育者との関わりも多くなり良い状態になってきたと安心していたが、最近、逆戻りをしたような行動が多く水を放出するといった遊びが出てきて困惑しているとの報告がありました。

U君とK君を巡って多くの事がゼミでは話し合われました。どの幼稚園でも、このように、保育者が子どもの状況にうまく応じられなく、よい対応が出来ない事例を持っており、A幼稚園の先生方の苦勞に共感を覚えました。

討論の中心になった事柄は、保育者と子どもが、うまく出会っていないと言うことでした。

A幼稚園の先生方は「一人一人の子どもの違いを認めよう」と話し合っているが、多くの子どもと共に過ごす中で、それがなかなか実現出来ないと葛藤する様子も窺われました。

津守先生は、これまでのご自分の体験から、「高い所に登ることと、水を放出する」と言うことの関係について考えてみる必要があること、K君の行動は気になるがそれはどうしてだろうか、との問いをなげかけて下さいました。ゼミに参加した保育者、研究者のこれからの課題になりました。

*

四歳七名の男児の遊びを巡っては、ゼミでは、討論の中には組み入れられませんでした。その



後、A幼稚園の先生方のレポートが提出され、その中に、この日の状況に対するコメントがありました。この日のY君を中心に集っているグループの遊びはウルトラマンごっこの続きをしていることがわかりました。先生は、子どもたちの遊びのイメージを壊すことを懸念されていました。保育者が必要としないような遊びにどう対処して良いかわからないと記述してありました。先生の不安な一面が窺われました。

このゼミでは、K君、U君、Y君を通して、保育者と子どもの出会いをどのように考えたらよいか、多くの学びをしました。子どもに毎日接している保育者は、その時々々の状況の中で、いろいろ判断しなければならぬ事柄に迫られ、それが、子どもとの対応に繋がっていく様相をあらためて知らされました。研究者は、一人一人の子どもや、保育者を、どのように捉えたらよいか、側面

から省察して下さいました。

「大人と子どもの間に横たわる問題」としては結論をここで出すのではなく、一人一人の子どもに「心をくだいて」接していく事の重要性が認識されたように思います。一方、保育者はもう少し、自信をもって子どもと共に生活する必要があり、その為には、それぞれの園の保育者がどのような信念を持って生きていくか、問い直されなければならぬことも学ばされました。

(青山学院幼稚園)